

教育・指導への感謝と未来への還元

井桁正堯 (兵庫医科大学)

『日本計量生物学会は、生物学・医学・農林水産学・生態学・環境科学などの諸分野の研究を、計量的・数学的・統計的手法を用いて推進するとともに、そのような研究手法の普及、関連研究者相互の交流を推進し、かつ、外国の研究団体との連絡を密にすることを目的としています。このような手法を研究する学問を、従来は生物統計学、生物測定学、バイオメトリックスなどと呼んでいましたが、最近の計量的・数学的手法のめざましい発展にかんがみ、本会は「計量生物学」と呼称することにいたします。』

日本計量生物学会の設立趣意書の一文を読み、計量生物学は、諸分野の研究推進との強い結びつきの中にあり、諸分野における 1 人 1 人の統計家の活動がこの学問の未来をつくるのだと改めて認識しました。私の活動する医学分野では、先人の先生方のご尽力により、統計学の必要性が認識され、適切な評価方法や解析方法、サンプルサイズ等を医師と議論する機会も多く、統計学は開かれた学問であることを感じます。そのため、学問の継続的な発展には、統計的手法の修得や研究に加え、諸分野の研究における啓蒙活動や交流、集計解析等の実質的な貢献を通して認知されることも重要な役割を果たします。このように、生物統計家は多様な役割を求められ、その人材育成は容易ではないと感じます。私は、大学に身を置き、教育・研究・臨床研究支援を行う駆け出しの研究者ですが、これまで、どのような教育・指導を受けてきたのかを、振り返ってみたいと思います。

最初に医学分野の統計学に関わったのは、国立保健医療科学院での高橋邦彦先生との出会いでした。疾病地図の作成やデータ入力等の補助として雇われ、医学・疫学での統計解析の一端を経験しました。私は、多変量解析、漸近理論といった数理統計学の研究室の学生でしたが、統計解析を通して医学・疫学の意味決定がなされる様子を目の当たりにして、生物統計学という応用の世界に関心をもつようになりました。高橋先生との対話では、諸分野へ統計家が参画し、活躍するフィールドを開拓することへの強い思い・使命感が感じられ、次第に感化されていきました。その後、武田薬品工業株式会社に就職し、良い手本・目標となる上司、指導者、先輩、同期に囲まれながら、治験のデザインや統計解析、承認申請業務等の実務を行いました。各種統計手法の適用可能性や、ガイドライン・規制文書の解釈・微妙なニュアンス、実務上の落としどころや他部門との交渉等について、経験者との議論や実地での経験から多くのことを学びました。次第に、発展的なデザインや解析方法等の活用が検討されるようになり、現場の問題を本質的に解決する力をつけようと、松井茂之先生が開講された名古屋大学大学院医学系研究科の生物統計学の講座へ進学しました。研究指導では、数々の至らない点を明らかにしていただきました。特に、既存法の問題の本質と、その問題を解決する意義を明確にし、提案法の良さを的確に伝えるためのデータや表現を突き詰める過程に関する指導は、普遍的に役に立つ貴重なものでした。また、世界の研究者を相手に、共同研究や本の執筆、国際会議の運営などをされる姿は大変刺激的で、新たな世界観や学問の深さに触れることができました。これらの経験がアカデミアへの転機となり、現職である兵庫医科大学へ移りました。本学での研究活動は始まったばかりですが、医療統計学教室の大門貴志先生とともに、臨床研究の支援・支援体制の整備、医師向けのセミナー等を実施しています。

私が受けた教育・指導を振り返ると、その芯のところは、教育者、研究者、実務家それぞれの立場での強いポリシーに裏付けられた、指導者の発言や行動にありました。これらに感化され、私自身の考え方や行動が変化し、特に、研究活動への動機付けの点で強い影響を受けてきたように思います。若輩者

の私では、具体的な教育の方向性等を示すことはできませんが、私が指導者の先生方、皆様方に対して感じているように、この人に出会えて良かったと思われるような人材を目指して努力を続けたいと思います。私自身の経験をいつか教育の場に還元し、計量生物学の明るい未来に繋がる良い循環を生み出せるよう、まずは統計学的方法論の研究と医学的研究の双方に対して積極的に行動し、経験を重ねていきたいと思っています。最後に、この場をお借りして、ご指導いただいた先生方、皆様方に改めて深く感謝申し上げます。